

# ブルクミュラー 25の練習曲から学べることの考察

## Consideration to Learn from Practice Songs of Burgmuller:25 Etudes

浅見 彩 賀

(こども学科 非常勤講師)

**要旨** たくさんあるピアノ学習のための教材の中で、保育士養成校でもよく使用されるブルクミュラーの25の練習曲。各曲の音楽的要素、演奏するに当たっての課題、楽曲分析を学習することで、ピアノを弾くのに必要な技術面のほかに、表現力や想像力が身につくと考えられる。一曲一曲に標題がついているので、標題と音楽の持つキャラクターの関連性にも触れ、25の練習曲からどのようなことが学べるか、どのような内容になっているのかを探る。

【キーワード：音楽 ピアノ】

### I. はじめに

ピアノを学ぶ上で多くの人が勉強するブルクミュラー作曲の25の練習曲 op.100。バイエルや導入から初歩レベルのテキストを終えたピアノ学習者や、保育士養成校でもバイエルを修了した学生に、より表現力をつける教材として、ポピュラーである。

作曲者のヨハン・フリードリヒ・フランツ・ブルクミュラーはドイツのレーゲンスブルクに生まれ、26歳の時にパリに移住、バレエ音楽や舞台用のオーケストラ曲、歌曲を多く書いたが、主にピアノ教師として人気を得て活躍し、この曲集は1851年に出版された。原題はフランス語で、「25 Etudes faciles et progressives, composées et doigtées expressément pour l'étendue des petites mains (訳：小さな手でも弾けるように構成と運指を考えた、段階的に取り組める易しい25の練習曲)」となっている。この練習曲集の大きな特徴は、1曲1曲に標題がついていることだろう。

ロマン派音楽の入口、基礎作りであるこの曲集について分析し、またこの曲集を勉強することでどのような力が身につくのかを考察する。

### II. 方法

#### 1. 25曲の音楽要素

全25曲の調性、調号、拍子、楽語、強弱について調べ、一曲一曲進むにつれて、上記の項目がどのように発展しているか、また標題と調性、楽語の関連性について考える。その上で曲の持っているキャラクターを表現するために、どのように学んでいくかを考察する。

#### 2. 各曲の特徴と練習目的

また、フランス語の原題にもある、「段階的に取り組める易しい練習曲」ということで、段階的とはどのようなになっているのか、各曲の特徴や練習目的を考察していく。

#### 3. 楽曲分析

第1曲《すなおな心》、第25曲《乗馬》を取り上げ、楽曲分析、和声分析をし、一番初めに取り組むであろう第1曲と、この曲集の集大成であろう第25曲を比較し、一冊を学ぶことで身につく力を考察する。

### III. 結果と考察

#### 1. 25曲の音楽的要素

各曲の音楽的要素については表1にまとめた。

##### 1) 調性、調号

何も調号のつかないハ長調、イ短調から、シャープ1つのト長調、ホ短調、フラット1つのヘ長調、ニ短調の曲が全25曲中20曲となっている。シャープ系では3つシャープのつくイ長調、フラット系では4つフラットのつく変イ長調がこの曲集では一番多い調号の曲となっている。

第3曲《パストラル(牧歌)》や第8曲《優しく美しく》、第10曲《やさしい花》などは標題からして明るい曲想がイメージできるが、これらの曲はそのイメージどおり長調で作曲されている。反対に短調で作曲されている第12曲《別れ》や第16曲《ちょっとした悲しみ》は暗い曲想がイメージできる。1曲1曲についている標題と調性は密

接に関係していると考える。

## 2) 拍子

4分の4拍子が11曲、8分の6拍子が5曲、4分の3拍子が4曲、4分の2拍子が3曲、8分の3拍子が2曲となっている。

単純拍子、複合拍子をバランス良く取り入れられていて、ピアノを弾くに当たって基礎的な拍子感は身につくようになっている。

8分の6拍子の楽曲について述べると、その拍子ののどかさが「パストラル」や「舟歌」で学べると考えられる。また、8分の6拍子のテンポの速い舞曲として「タランテラ」が取り上げられていて、このレベルからその雰囲気を知ることは特筆できることである。

## 3) 楽語

曲ごとに様々な楽語が用いられ、曲のキャラクターを表現して演奏する手がかかりとなっている。

第3曲《パストラル》では dolce (甘く柔らかく)、cantabile (歌うように) が用いられ、のんびりと穏やかな風景が想像でき、メロディーはのびのびと歌わせて演奏する。

第7曲《清らかな小川》では mormorendo (ささやくように、つぶやくように) が用いられていて、小川のせせらぎの表現の参考となる。ピアノニッシモから始まり、4分音符のメロディーを中心に、3連符のリズムがこの楽語と大きく関係している。

第9曲《狩》では agitato (せきこむように、興奮して)、dolente (痛ましげに、悲しげに) が用いられ、agitato には追いかけ、追い込む狩のイメージにつながり、dolente は狩で獲物を取れなかった悲しみなのか、動物の死に対しての感情なのか、様々なイメージをそれぞれが持つだろう。

第10曲《やさしい花》では deliatio (繊細に) が用いられていて、8分音符による分散和音の音型は花びらが1枚1枚のはかなさ、愛おしさなどのイメージができる。

第12曲《別れ》では agitato (せきこむように、興奮して)、espressivo (表情豊かに、感情をこめて) が用いられることで、穏やかではない、悲痛な別れということが考えられ、「別れ」のもつ感情をピアノでどう表現するか、表現力を求められる楽曲になっている。

第15曲《バラード》では misterioso (神秘的に)、animato (動きを持って) が用いられ、ミステリー

な物語が始まる感じはこの楽語がぴったりである。第21曲《天使の合唱》では armonioso (協和的に、和声的に) と用いられているので、この曲では和声の移り変わりを大切に、響きを持って弾くことが目的とされていると考える。よって、ペダルも使って弾くだけでは表現しきれない部分を補いながら、演奏する。

第25曲《乗馬》では marziale (行進曲風に)、delicate (繊細に) が用いられていて、出だしのモチーフは、馬に乗って行進している様子が想像できる。右手に3連符が出てくるところでは delicato が書かれていて、颯爽と馬が走る様子が想像ができる。右手の3連符にアクセントがついたり、大胆なポジション移動もあるので、リズムが崩れたりしないよう、この楽語が用いられているのではないかと想像することができる。

このように、楽語の意味を知った上で、それを演奏につなげることによって、情景をイメージでき、標題のついた曲の持つキャラクターを表現する手助けになると考える。

## 4) 強弱

ピアノニッシモからフォルテッシモまで出てくる。曲によってフォルテ、ピアノと強弱の幅が大きい曲もあれば、第1曲《すなおな心》や第7曲《清らかな小川》のようにピアノ、ピアノニッシモのみで書かれている曲もある。これは音量だけではなく、ピアノという強弱記号が持つキャラクターの中で大小を表現するというのではないかと考える。

表1 各曲の音楽的要素

	標題	調性	調号	拍子	楽語	強弱
1	すなおな心	ハ長調		4/4	dolce 柔らかく, 甘く	pp,p
2	アラベスク	イ短調		2/4	leggiero 軽やかに dolce risoluto 決然と, きっぱりと	p,f
3	パストラル	ト長調	# 1	6/8	dolce cantabile 歌うように	pp,p,mf
4	小さなつどい	ハ長調		4/4		p,f
5	無邪気	ヘ長調	b 1	3/4	grazioso 優雅に, 優美に leggiero	p,f
6	進歩	ハ長調		4/4		p,f
7	清らかな小川	ト長調	# 1	4/4	mormorendo ささやくように, つぶやくように	pp,p
8	優しく美しく	ヘ長調	b 1	3/4	leggiero	p,pp,mf,f
9	狩	ハ長調		6/8	agitato せきこむように, 興奮して dolente 痛ましげに, 悲しげに	p,f,pp
10	やさしい花	ニ長調	# 2	4/4	delicato 繊細に, 優美に	p,mf
11	せきれい	ハ長調		2/4	leggiero	p,mf,f
12	別れ	イ短調		4/4	agitato espressivo 表情豊かに, 感情をこめて	p,f
13	コンソレーション	ハ長調		4/4	dolce lusingando 媚びるように	p,mf
14	シュタイヤー舞曲	ト長調	# 1	3/4	granzioso 雄大に, 壮大に dolce deciso 決然と, 思い切って	mf,p,f
15	バラード	ハ短調	b 3	3/8	misterioso 神秘的に animato	p,f
16	ちょっとした悲しみ	ト短調	b 2	4/4	dolente	p,f
17	おしゃべりさん	ヘ長調	b 1	3/8		p,f
18	気がかり	ホ短調	# 1	2/4	agitato	p,mf

19	アヴェ・マリア	イ長調	# 3	3/4	religioso 敬虔に	p,pp
20	タランテラ	ニ短調	♭ 1	6/8	leggiero	f,p
21	天使の合唱	ト長調	# 1	4/4	armonioso 協和的に, 和声的に	p,pp
22	舟歌	変イ長調	♭ 4	6/8	dolce cantabile lusingando 優しく, 甘く	pp,p
23	再会	変ホ長調	♭ 3	6/8	agitato	p,pp,f
24	つばめ	ト長調	# 1	4/4	dolce	p,pp
25	乗馬	ハ長調		4/4	marziale 行進曲風に delicate	p,f,ff

## 2. 各曲の特徴と練習目的

第1曲《すなおな心》では、長いスラーのメロディーを、柔らかくなめらかに弾く練習。八分音符が多用されている。

第2曲《アラベスク》のアラベスクとは、アラビア風という意味を持ち、音楽においては、流麗なカーブで出来て椅子旋律線や動きの多い細かく上下する音型などで出来ている曲を指す。左右に出てくる16分音符を軽やかに均等な長さで弾く練習、高音域の音を読む学習である。

第3曲《パストラル》では、装飾音のある旋律を美しく歌わせて弾く練習。パストラルとはイタリア語でパストラーレと呼ばれ、ショームや笛を使う羊飼いの音楽を模した器楽曲、声楽曲。

第4曲《小さなつどい》の初めの6小節は、これからなにが始まるのかな、とわくわくさせるような序奏から始まる。3度と6度の連続進行の練習。第5曲《無邪気》では、連続する16分音符をレガートでひと息で弾く練習。

第6曲《進歩》では、左右の手で10度の並進行をバランス良く弾く練習。

第7曲《清らかな小川》では、片手で旋律、伴奏の弾き分け、聴き分けの練習。

第8曲《優しく美しく》の楽譜は一見難しそうに見えるが、1-2拍、2-3拍の間に装飾音が入っていると思うとすっきりする。32分音符は手首の力を抜いて弾く。

第9曲《狩》は、序奏とコーダを伴ったロンド形式(A-B-A-C-A)。序奏のスタッカートは鋭いパ

リットとした音で、それ以外は軽い音で。Cでは長い対旋律を歌わせる練習。

第10曲《やさしい花》では、音楽をフレーズとしてとらえ、2音ずつぶつ切りにされるようなアーティキュレーションにならないように注意する。

第11曲《せきれい》のせきれいとは、水辺に棲む、形の美しい小鳥の名前で、長い尾を上下に動かす。その様子が書かれていて、16分音符2つと8分音符で書かれたモチーフがたくさん出てくるが、最後の音が大きくなるように注意する。

第12曲《別れ》では、3連符の連続使用により、5指の分離を促す練習。

第13曲《コンソレーション》では、右手4-5, 3-4指によるトリルの練習、8~23小節は右手での二声部の弾き分け、24-27小節は左手での二声部の弾き分け、28-31, 32-35, 36-37小節は、それぞれフレーズごとに左右の要素のスムーズな役割交代が課題。

第14曲《シュタイヤー舞曲》とは、シュタイヤー地方の民族舞曲で、拍子・リズム・内容から「レントラー」であると推察できる。民族舞曲特有の楽器の音を表していたり、23-24, 27-28小節は民族唱法「ヨーデル」を表す。

第15曲《バラード》、19世紀ロマン派の中で、バラードは物語性、ドラマ性などある種の文学的要素や想像力が必要とされる。

第16曲《ちょっとした悲しみ》の16分音符は和音の響きを作るつもりで、ゴツゴツしないようなめらかに弾く。左右に出てくる旋律は美しく歌

わせて弾く。

第17曲《おしゃべりさん》では、指換えを伴う同音連打と、その後続く度数の開いた音の確実な打鍵がこの曲の課題。

第18曲《気がかり》では、始めから終わりまで、同じ長さの音符で進行していく、ペルペトウウム・モビレ（無窮動、常動曲と呼ばれることもある）の練習曲。

第19曲《アヴェ・マリア》は、オルガン伴奏の教会合唱音楽というイメージを持って演奏する。メロディーとなる音の流れが浮かび上がるように弾く。

第20曲《タランテラ》のタランテラとはイタリア発祥の民族舞踏で、激しい舞踏。そのためか、この曲の序奏もフォルテで始まる。序奏のユニゾンのはっきりした音で弾く。8分音符の音階、分散和音がたくさん出てくるが、同じ早さでよくコントロールすることが大切である。

第21曲《天使の合唱》は教会音楽のイメージを持ち、音楽の内容に相応しい音を、指のタッチやペダルで作る。

第22曲《舟歌》のバルカローレは、ロマン派のキャラクターピース名。どの音も柔らかく歌わせて弾く。

第23曲《再会》では、両手における和音連打のための練習曲。

第24曲《つばめ》では、手を交差して弾く練習曲。

第25曲《乗馬》では、和音のスタッカートと音階のレガート奏法、音域を広く使う練習。

### 3. 楽曲分析

第1曲すなおな心はハ長調で、曲中に出てくる臨時記号も5個のみである。標題がすなおな心ということで、穏やかな曲想がイメージできるが、実際に楽譜をみると、主に長いスラーの8分音符の旋律と全音符の伴奏で作曲されていて、わかりやすく取り組みやすい曲である。8分音符の旋律は手首を柔らかく音高や和声的な表現をしながらなめらかにレガートに弾くという課題がある。伴奏である三和音や重音は、その8分音符の旋律を邪魔することなく伴奏として響かせ、この曲の支えと重要な役割を持っている。

第25曲乗馬もハ長調4分の4拍子で作曲されているが、この曲は様々な場面転換がある。出だしの部分は楽語のmarziale（行進曲風に）とあるように、テンポ感の良い和音の刻みと、付点のリズ

ムが優雅に馬に乗っているところをイメージさせる。3連符の両手で上行するところは何かを飛び越えるような場面、右手に3連符の旋律は駆ける場面が想像できる。コーダに入り今まで出てこなかった16分音符での音階の左右でかけあう上行形を経て、ユニゾンでの下降形はクライマックスを迎え、最後はフォルテッシモの和音のカデンツで曲を終える。

付点のリズムや3連符といった特徴的なリズムが出てきたり、場面転換がはっきりしている構成、ポリフォニックな箇所やホモフォニック箇所、レガートやスタッカートというように様々な音楽的要素が盛り込まれている。

第1曲、第25曲共に同じハ長調4分の4拍子でありながら、転調を含む臨時記号や様々なリズム、1曲の中での曲想の変化は、楽譜を見ると一目瞭然である。また、すなおな心は22小節（繰り返しなし）、音域が3オクターブであるのに対し、乗馬は46小節（繰り返しなし）、5オクターブとなっている。曲の長さや最低音から最高音までの音域の広さも倍近くに発展している。

### IV. まとめ

ロマン派音楽への入口ともいえる、ブルクミュラーの練習曲。1曲1曲に標題があることが大きな特徴といえる。ブルクミュラーはこの曲のタイトルを「25 Etudes faciles et progressives, composées et doigtées expressément pour l'étendue des petites mains（訳：小さな手でも弾けるように構成と運指を考えた、段階的に取り組める易しい25の練習曲）」と題した。段階的に取り組める易しいという点において、曲が長くなる時にはロンド形式を用い、仕上げるのにあまり時間をかけずに楽しめるよう作曲者の意図を感じる。トリルの記号ではなく、音として実際に書かれていたり、難しい指でのトリルの練習が8分音符で書かれていたり、段階的に取り組める工夫が様々な箇所で見られた。練習曲といっても単に指を鍛えるトレーニングの曲ではなく、表現力、想像力を育てていく曲集である。

今後ピアノを弾いていく上で大切な表現の仕方を曲の持っているキャラクターを味わいながら、着実に取り組んでいくことで、この曲集を終える頃には自然に身につけているのではないだろうか。長い間、多くの人々が学んでいる理由の一つは、

そこにあると考える。

今回、論文で取り上げた《25の練習曲 op.100》の他に、1858年出版の《18の練習曲 op.109》、1854年出版の《12の練習曲 op.105》を作曲しており、今後研究していきたい。

謝辞

本論文の作成にあたり、いつも熱心で丁寧なご指導、温かい励ましと共に、多大なる示唆をいただきました小澤和恵先生に、心より感謝いたします。

\*参考文献

J.ブルクミュラー「25の練習曲」(全音楽譜出版社)

ブルクミュラー 25の不思議 (音楽之友社)

図1 すなおな心

La candeur  
すなおな心

Allegro moderato (J. 126~138) F. Burgmüller, Op. 100

図2 乗馬

La chevaleresque  
乗馬

Allegro marziale (J. 120~126)